

## 総裁記者会見要旨 (4月11日)

G7 終了後の額賀大臣・白川総裁内外記者会見における総裁発言要旨

2008 年 4 月 12 日

日本銀行

於・ワシントン

2008 年 4 月 11 日(金)

午後 7 時 15 分から約 30 分間(現地時間)

### 【冒頭発言】

今回の G7 では、世界経済がエマージング諸国の高成長に牽引される形で、減速しながらも全体としては成長を続ける可能性が高いこと、またそれと同時に、米国経済の停滞や国際金融市場の動揺、国際商品市況の高騰を背景としたインフレ圧力の高まりなど、世界経済の不透明感が高まっているという認識が共有されたと思っています。私からは、日本の金融市場の状況や日本銀行が行っているきめ細かい金融調節について説明を行いました。また、日本の金融システム問題につきましても話しました。その際、金融とマクロ経済の複雑な相互作用を認識しつつ、市場参加者の損失を認識することが大事であること、それから中央銀行としては流動性供給という面での様々な施策は非常に大事だということを説明いたしました。

### (以下質疑)

【問】 昨日、日本の 90 年代における金融危機の経験を G7 各国と共有したいとお話がありましたが、総裁からどういうお話をされて、どのような反応があったかをお聞かせ下さい。

【答】 昨日も申し上げましたが、お尋ねいただいた件については、必ずしも G7 の場だけではなく、今回ワシントンに参りまして主要国の中央銀行総裁と個別に面談する機会もありますから、そうした様々な場を通してお話をしたいということでありました。必ずしも G7 の場だけでは

ありません。今日の G7 で発言した内容は、先ほど申し上げたことに尽きています。自分が申し上げたことについて格別の議論があった訳ではありません。ただ、G7 の場というのは色々な人が意見を述べて、その多様な意見をそれぞれが受け止めたうえで、今後の政策に活かしていくのだと思います。

【問】 初めて G7 に参加された率直なご感想をお聞かせ下さい。また、記念撮影の時に笑顔でキング・イングランド銀行総裁と話されていたようでしたのでその内容をお聞かせ下さい。

【答】 東京を発つ前の日に総裁の辞令をもらいまして、慌しくワシントンに参りましたが、旧知の方からも、今回初めてお会いする方々からも、中央銀行総裁の仲間として暖かい歓迎の言葉をいただき、非常に嬉しく感じました。キング総裁と話した内容自体については詳しく申し上げられませんが、以前イングランド銀行を訪ねた時に色々な議論を一緒にさせていただいたことを二人で懐かしんだということです。

【問】 会議前には公的資金の注入について話したいとおっしゃっていたかと思います。コミニケの中では公的資金の注入についての明確な表現はありませんが、G7 の場で議論があったのか、あるいはなかったのかをお聞かせ下さい。

【答】 先ほどの質問に対する答えとも重なりますけれども、G7 の場で全てを議論するという訳でなく、色々な場を通じて自分なりの考えを申し上げていきたいと思っています。公的資金導入の是非については、東京でも申し上げましたが、基本的には、自国がおかれた金融危機の状況やセーフティーネットのあり方を踏まえて、各国が決めていくものだと思います。

【問】 今回の G7 は各国が難しい状況を抱えた中で開催されましたが、どの辺りを強く意識して会合に臨まれましたでしょうか。

【答】 各国の違いという点で申し上げますと、今回のサブプライム住宅ローン問題に端を発する国際金融市場の混乱の程度というのは、国によっても違いますし、その結果起こる景気への影響の強さも国によって若干異なります。インフレ圧力という面でも、食料・エネルギー価

格上昇の影響を強く受ける新興国と相対的にその影響が小さい国とがありますし、色々な意味で差があると思います。いずれにしても、大臣がお話されたように、各国の状況に応じて政策面の対応をしていくことに尽きると思います。

【問】 G7 への初参加の手応えと率直な感想をお聞かせ下さい。

【答】 私は新参者ですから、過去の G7 と比較しての感想という訳ではありませんが、この 10 年くらい BIS を中心とする中央銀行間の会議に参加する機会がありましたので、それを踏まえると、G7 は各国の財務大臣が出席する会議ということで、より大きな視野で議論をしていると思いました。これからは、微力ではありますが、こういう G7 の場も含めて国際的なフォーラムで日本の経済・金融の実態について説明して、そのうえで、日本にとってもそうですが、世界の経済や世界の金融市場の安定のために貢献したいという思いを新たにしました。

【問】 今回の金融混乱の状態は、金融グローバリズムの中心である米国を直撃しているということで、過去に起きた金融危機とは本質的に異なり、ダメージは比べ物にならないと思いますが、G7 の出席を通じて、どのように深刻さの度合いをお感じになりましたか。

【答】 G7 だけではなく、色々な場を含めての印象ということにならざるを得ませんが、去年の夏以降の国際金融市場の動揺を受けて、各国の政府や中央銀行が非常に真剣に取り組んでいるということを色々な形で感じました。その一つの例が、コミュニケで言及されている FSF (金融安定化フォーラム) のレポートです。確か去年の 10 月に G7 が FSF に対してこのレポートの作成を求め、そして今回こういう形でレポートが纏められましたが、その中の対策も、例えば向こう 100 日以内に実施するなど、全て時限を定めて大変真剣に取り組んでいるとの印象を強く受けました。

また、今回の金融混乱が深刻かどうかという次元よりも、金融システムの色々な問題が形を変えて現れているということのように私は感じます。日本の不良債権問題の時には、主として貸出(ローン)の形でしたが、今回は貸出だけでなく金融商品、それも複雑な金融商品から生み出されたものという側面があります。

それから、流動性対策の面でも、以前は資金の流動性の問題でしたが、今回は資金の流

動性とリンクする形で、市場の流動性ということが問題になったと思います。ただ、このように変わっている部分もありますけれども、金融システムの危機は昔も今も変わらない部分の方がやはり大きくて、基本的に危機が起きる以前に色々な形で不均衡が積み上がっていった、それが最終的に巻き戻されていくという点においては昔も今も変わっていないと思います。

【問】 これまでの様々な経験を踏まえて、今回の危機の深刻さはどれくらいのものだとお感じでしょうか。

【答】 金融システムにおける問題の深刻さを客観的に比較することは難しいですが、非常に大きな金融市場の混乱が起きているというのは事実だと思います。ただ、それと同時に実体経済をみてみますと、確かに米国の景気はかなり急速に減速していますけれども、エマージング諸国は総じて堅調です。また、欧州経済も成長率は下がってはいますけれども相対的に頑健ですし、日本もそうであります。そういう意味で、現時点で金融市場の混乱が実体経済に大きく波及(スピルオーバー)しているという訳ではないと思いますし、それから大臣からお話がありましたが、何よりも金融システムの面で色々な対策が非常にスピーディーに採られていると思います。したがって、一口に比較するのはなかなか難しい、といった感じであります。

以 上